九州大学学術情報リポジトリ Kyushu University Institutional Repository

中国「鏡」説話考

多賀, 浪砂 純真女子短期大学: 非常勤講師

https://doi.org/10.15017/9788

出版情報:中国文学論集. 6, pp. 13-21, 1977-05-25. 九州大学中国文学会

バージョン: 権利関係:

中国「鏡」説話を

多 賀 浪 砂

加えるものである。

小説の発生が六朝であるととに一つの傍証を加え、かつ隋末唐初頃小説の発生が六朝であるととに一つの傍証を加え、かつ隋末唐初頃小説の発生が六朝であるととに一つの傍証を加え、かつ隋末唐初頃 小説の中でもとりわけ晋朝と深い関係を有していることから、志怪 六朝の中でもとりわけ晋朝と深い関係を有していることから、志怪 この小論は「鏡」に関する説話群 (以後便宜上「鏡」説話と称する) がこの小論は「鏡」に関する説話群 (以後便宜上「鏡」説話と称する) が

び「古に鑑みて今を正す鏡」という「鑑」字と共通の使用例であった。初め「鏡」字を用いるようになる。「鏡」字が文献に初出す現によって「鑑」字を用いるようになる。「鏡」字が文献に初出すのであった。初め「監」字を用いて表わし、その後、金属の鏡の出のであった。初め「監」字を用いて表わし、その後、金属の鏡の出ってあり、った。初め「監」字を用いて表わし、その後、金属の鏡の出った。、鏡は「水かゞみ」であり、器の中の水面に容姿を映すも古来、鏡は「水かゞみ」であり、器の中の水面に容姿を映すも

て、およそ鏡を神秘なものとしてとらえる用例はない。

初めて鏡を神秘なものとしてとらえる文献は、後漢、劉歆の『西

ない。 「ない」である。 それには、「漢の宣帝が獄に下るも、身毒国(イ 京雑記」である。それには、「漢の宣帝が獄に下るも、身毒国(イ 京が)の宝鏡一枚を身につけていたので、災いから逃れ得た」とい を守る身毒国の宝鏡、及び五臓六腑を照見する方鏡が文献にあらわ を守る身毒国の宝鏡、及び五臓六腑を照見する方鏡が文献にあらわ を守る身毒国の宝鏡、及び五臓六腑を照見する方鏡が文献にあらわ を守る身毒国の宝鏡、及び五臓六腑を照見する方鏡が文献にあらわ ないが、秦の始 という話を採録している。ここに初めて、災いから逃れ得た」とい ないが、秦の始 という話を採録していたので、災いから逃れ得た」とい ないから身 を守る身毒国の宝鏡、及び五臓六腑を照見する方鏡が文献にあらわ ないが、秦の始

に会うことができる」という話を載せ、あるいはまた「この世に永来の事を知ることができ、又鏡を四枚使うことによって多くの神々ろの方諸及び燧を用いて寿命を延ばし、又盲人や病人を治す」という。 「抱朴子」である。すなわちこの書は「鏡の一種であるとこ葛洪の『抱朴子』である。すなわちこの書は「鏡の一種であるところで食の茶月の金文太隽中してお飯されている文献に、当

ここに、鏡を道教の道具として信奉する考えが明文化されたと見るその後に、鏡を使って妖魔を追い払った実例を幾つか載せている。から、山に入る道士は九寸以上の鏡を背負って行くのだ」といい、く生きながらえて化物となった老精も、鏡にはその本性をあらわす

ことができる。

った」という話などを採録している。ここにもまた異国と、妖魔を魑魅を照らし出し、化物の真の姿を映し出す石鏡のようなものがあした火斉鏡が暗い所を昼のように照らし、又鏡の前で話すと鏡中のした火斉鏡が暗い所を昼のように照らし、又鏡の前で話すと鏡中のした火斉鏡が暗い所を昼のように照らし、又鏡の前で話すと鏡中のと、大子鏡が離上された」という話、「集胥国から韓房なる異人がもたらと、「という鏡がでして、質の主義『王とのほかにも、鏡の神秘性に言及する文献として、晋の王嘉『王とのほかにも、鏡の神秘性に言及する文献として、晋の王嘉『王とのほかにも、鏡の神秘性に言及する文献として、野の王嘉『王とのほかにも、鏡の神秘性に言及する文献として、田の王嘉『王とのほかにも、鏡の神秘性に言及する文献として、田の王嘉『王とのほかにも、鏡の神秘性に言及する文献として、田の王嘉『王とのほかにない。

"甘卓"といった人物にまつわるエピソードとして、鏡が未来の凶(い)やゝ時代を下り、唐初に編纂された『晋書』には"殷仲文"及びて「病気のありかを示す仙人鏡」の話を採録している。

又、『述異記』には、先述の『西京雑記』の『方鏡』の話を受け

た、その上に携帯可能な鏡が献上された、と考えることができる。ば、前漢中期頃までに、異国から、中国在来の鏡よりは性能の秀れ、以上を総合するに、仮に『西京雑記』が採録する古代説話によれ兆を予言した話を記録している。

しかしながら鏡を神秘なものとする考えが精神的な意味あいで問しかしながら鏡を神秘なものとされたとはいえ、晋そのものの歴史あり、「晋書」もまた初唐に編纂されたとはいえ、晋そのものの歴史あり、「晋書」もまた初唐に編纂されたとはいえ、晋そのものの歴史あり、「晋書」もまた初唐に編纂されたとはいえ、晋そのものの歴史あり、「晋書」もまた初唐に編纂されたとはいえ、晋そのものの歴史を記した書であり、しかもそとに登場する、股仲文、及び、甘卓、を記した書であり、しかもそとに登場する、股仲文、及び、甘卓、なる人物もまた東晋の人である。

て鏡を精神的な意味で取り扱い、それに神秘性を付与させる、といてれらのととを考え合わせてみると、東晋時代に至って、はじめ

う考えが生まれて来たのではないかと考える。

=

上から分類して、
王度『古鏡記』は、隋末唐初頃、王度なる人物によって撰された王度『古鏡記』は、隋末唐初頃、王度なる人物によって撰された王度『古鏡記』は、隋末唐初頃、王度なる人物によって撰された王度『古鏡記』は、隋末唐初頃、王度なる人物によって撰された王度『古鏡記』は、隋末唐初頃、王度なる人物によって撰された王度『古鏡記』は、隋末唐初頃、王度なる人物によって撰された王度『古鏡記』は、隋末唐初頃、王度なる人物によって撰された王度『古鏡記』は、隋末唐初頃、王度なる人物によって撰された王度『古鏡記』は、隋末唐初頃、王度なる人物によって撰された王

れ話〉 A、鏡が妖魔の正体を現わし殺す話〈第一、三、五、六、七、

C、鏡が疫病になった病人を治す話へ第四話>B、鏡が日蝕・月蝕に影響される話へ第二話>

のような四種に分って考察を加えてみることにしよう。

D、鏡が荒海を鎮め難波を免れる話へ第八話>

A、第一話は『捜神記』の中の<張華と狐>の恋、及び『異苑』の一の<永康縣の人>の語から深い影響を受けているように思われの中の<永康縣の人>の間に介在して妖魔を退治する人物を設置し体を現わさせるものとの間に介在して妖魔を退治する人物を設置し体を現わさせるものとの間に介在して妖魔を退治する人物を設置し体を現わさせるものとの間に介在して妖魔を退治する人物を設置しているところ等、このような諸点を見た場合、『古鏡記』第一話は『捜神記』の<張華と狐>及び『異苑』の<永康縣の人>と相通ず「捜神記』の<張華と狐>の記、及び『異苑』るところが色濃く認められるからである。

第六話は、村人が恐れて供物を供し、もしそれを供さなければと類似している。と類似している。と類似している。 『書十八において妖魔がやはり』部郡』『府君』と名乗るところが、『捜神第五話は、妖魔が『山公』『毛生』と名乗るところが、『捜神

と思われる。

「兵士が湖水の神であるところの『白魚(妖魚)』との約束を破り、郷太湖〉を踏まえているように思われる。勿論この『異苑』の話は、いう筋書であるが、ここに登場する妖魚、鮫のような化物の源流は確果りがあると信じている湖水の神を、鏡で正体を現わさせて殺すと祟りがあると信じている湖水の神を、鏡で正体を現わさせて殺すと祟りがあると信じている湖水の神を、鏡で正体を現わさせて殺すと

は相違するけれども。 う話で、いかにも六朝志怪小説らしいところが『古鏡記』第六話とこれを煮て食うと、たちどころに祟りがあって全員溺死する」とい

第七話及び第九話は、共に女性に取り憑いた妖魔を退治するといるのである。

山〉などの話が見られ、『古鏡記』もそれらから影響を受けている(ホタン) などの話が見られ、又宝剣の霊験についても『王子 年 拾 遺記』の<昆吾昼のように照らすという発想は『西京雑記』など六朝志怪小説にもける輝きの点で薛狭の宝剣に勝るという話である。宝物が暗い所をB、第二話は、鏡が日蝕・月蝕の影響を受けることと、暗中におB、第二話は、鏡が日蝕・月蝕の影響を受けることと、暗中にお

また「抱朴子」(金丹)にも「鏡に置いた露を飲んで生命を延ばす」記」には「五騰六腑を照見し病気のありかを示す鏡」の話があり、个負局先生なる仙人が、鏡を研ぐ毎に病人の有無を尋ね、病人がおぐ負局先生なる仙人が、鏡を研ぐ毎に病人の有無を尋ね、病人がおさま全快した、という話である。これは劉向『列仙伝』の「鏡を研で、第四話は、疫病が流行したが鏡で照らされた病人だけはすぐ

つ」という風にイメージをふくらませたものと考えられる。が答える」を踏まえて更にこれに創作を加え、「鏡の精が夢枕に立れる。又、鏡精(鏡の精)。に関しては『王子年拾遺記』の中の「影話があって、これらも『古鏡記』の第四話に関連あるものと考えら

D、第八話は、それが踏襲したと考えられる先行資料は出ては来て、第八話は、それが踏襲したと考えられる先行資料は出ては来り、第八話は、それが踏襲したと考えられる先行資料は出ては来り、第八話は、それが踏襲したと考えられる先行資料は出ては来る、第八話は、それが踏襲したと考えられる先行資料は出ては来の瀬澤然一体となって出来たものかと思われる。

=

六朝期の「鏡」説話における「鏡」は、妖魔の正体を発く、だけがら一つの伝奇風小説として開花させたものである。係の説話からも大きな影響を受けて、ふんだんにこれらを吸収しな説から素材を見つけ、しかも「鏡」説話だけでなく「鏡」とは無関説から素材を見つけ、しかも「鏡」説話だけでなく「鏡」とは無関

ないので、さらに工夫を加えて、それまでの説話群にストーリーとうだけに終わってしまえば、それは単なる素材を投げ出したに過ぎわれる。このことは六朝期のように"鏡が妖魔の正体を発く"といわれる。これは 道 教 の "護 符"の影響を受けてを殺す、力が付与される。これは 道 教 の "護 符"の影響を受けてを殺す力など持っていないが、『古鏡記』になると「鏡」に"妖魔で殺す力など持っていないが、『古鏡記』になると「鏡」に"妖魔の正体を発く"だり、「

しての新しい展開を持たせたものと言える。

しかしこのことを更に深く考察するならば次のようなことがいえた。六朝期の志怪小説は、怪を志すことにのみ興味があり、そのなどにのみ専心して筆を走らせている。つまり、いつどこにどのような妖怪変化が現われ、どういう事件を引き起こしたとか、どこそっな妖怪変化が現われ、どういう事件を引き起こしたとか、どこそのままに語るところにこそ、六朝志怪小説の特色があるのである。また、確かに六朝志怪小説においても、博学あるいは強健なる。また、確かに六朝志怪小説においても、博学あるいは強健なる。また、確かに六朝志怪小説においても、博学あるいは強健なる。また、確かに六朝志怪小説においても、博学あるいは強健なる。また、確かに六朝志怪小説にない。とれらはその話一話で終わる。妖怪変化を殺害した人物が、更に他のよらな妖怪変化を退治するという話はない。

を絶、もののけ退治と、征伐の旅行記録とでもいうべきものなのでたものではあるが、そこに登場する妖魔たちは、人間に姿を借りていたものではあるが、そこに登場する妖魔たちは、人間に姿を借りていたものではあるが、そこに登場する妖魔たちは、人間に姿を借りていたものではあるが、そこに登場する妖魔たちは、人間に姿を借りてとりやふたりではない。それどころか後半になると王勣は古鏡を持とりやふたりではない。それど立るが、そこに登場する妖魔たちは、人間に姿を借りてたものではあるが、そこに登場する妖魔だちは、人間に姿を借りてたものではあるが、そこに登場する妖魔だちは、人間に姿を借りてたものではあるが、というではあるが、またいというではある。

苑』との明確な相違点は、淫祀を否定することによって祟りを受け『異苑』の<東郷太湖>とには類似点もあるが、『古鏡記』と『異例えば淫祀にしても、先に 述べた ように『古 鏡 記』の第六話と

るか否かというところである。

は時にかかる淫祀を利用することはあっても大抵は淫祀を廃止するは時にかかる淫祀を利用することはあっても大抵は淫祀を廃止するたことによって、その人は処罰を受けている。無論、当時の為政者が、六朝志怪小説は、人間の方が妖魔にやられ、廟に無礼を働いてば、六朝志怪小説は、人間の方が妖魔にやられ、廟に無礼を働いてば、六朝志怪小説は、人間の方が妖魔にやられ、廟に無礼を働いてば、六朝志怪小説は、人間の方が妖魔にやられ、廟に無礼を働いてば、六朝志怪小説は、人間の方が妖魔にやられ、廟に無礼を働いてば、六朝志怪小説は、人間の方が妖魔にやられ、廟に無礼を働いてば、六朝志怪小説にあっても、確かに作品によっては「廟」が必ずし六朝志怪小説にあっても、確かに作品によっては「廟」が必ずし六朝志怪小説にあっても、確かに作品によっては「廟」が必ずし、六朝志怪小説にあっても大抵は淫祀を廃止する

ののように思われる。 淫祀を否定、廃止、廃絶する確固たる考えがあったことを物語るもいて正面からぶっつぶしてしまう。これは編者王度の脳裏の中に、いて正面からぶっつぶしてしまう。これは編者王度の脳裏の中に、 れてはいなかったのである。

あっては、妖魔が跳梁しているのと同様、淫祀もまた決して否定さ方向にあったようである。しかし為政者はともかく六朝志怪小説に

「鏡」の力を借りた人間に妖魔が打倒され、淫祀が廃絶されることとれに対して『古 鏡 記』で は そのような妖怪の影が消え、専ら達にとび回り、妖怪変化全盛の観を呈している。繰り返している。それ故、六朝志怪にあっては妖怪変化が一きわ濶繰り返している。それ故、六朝志怪にあっては妖怪変化が一きわ濶線の近している。それ故、六朝志怪にあっては妖怪変化が一きわ濶

に力点が置かれている。すなわち『古鏡記』は六朝志怪小説から唐に力点が置かれている。すなわち『古鏡記』は六朝志怪小説からの脱却であり、伝奇小説への妖怪変化を一ケ所に集めて殺してしまい、それまでの妖怪変化中の妖怪変化を一ケ所に集めて殺してしまい、それまでの妖怪変化中の妖怪変化を一ケ所に集めて殺してしまい、それまでの妖怪変化中の妖怪変化を一ケ所に集めて殺してしまい、それまでの妖怪変化中の妖怪変化を一ケ所に集めて殺してしまい。それまでの妖怪変化中の妖怪変化を一大の人にない。

4

更に文章構成の上から『古鏡記』を眺めてみよう。

第二節において見たとおり『古鏡記』は、すでに六朝志怪小説から様々の逸話を吸収し、従来独立した話として断片的に存在していたと思われる九つの話を、改めて大業七年から十三年までの一貫した記録として一篇の伝奇小説にまでまとめあげているわけで、それがまだ稚拙な段階であるとはいえ、文章構成力の点で、小説というがまだ稚拙な段階であるとはいえ、文章構成力の点で、小説というがまだ稚拙な段階であるとはいえ、文章構成力の点で、小説というがまだ稚拙な段階であるとはいえ、文章構成力の点で、小説というがまだ稚拙な段階であるとはいえ、文章構成力の点で、小説というがまだ稚拙な段階であるとはいえ、文章構成力の点で、小説というがまだれて、第一話に入る前の導入部における王度が古鏡を入手ある。例えば、第一話に入る前の導入部における王度が古鏡を入手なるになど、これら各部分の話は、例え編者王度自身の純粋な創作ではないにせよ、全体を一篇としてまとめるととに大きく寄与してではないにせよ、全体を一篇としてまとめるとに大きく寄与してではないにせよ、全体を一篇としてまとめるとの一貫している。

の言葉や文章を吸収しながら、張生と五嫂・十娘との出会いから別撰『遊仙窟』が、六朝や唐初の韻文・散文の中から取り込めるだけ撰。のことは『古鏡記』とほゞ同時期に書かれたとみられる張文成

石に努めていた当時の様相を示すものだといえよう。 本ところと構文が類似している。すなわち『遊仙窟』の文章は、あるところと構文が類似している。すなわち『遊仙窟』の文章は、あるところと構文が類似している。すなわち『遊仙窟』の文章は、あれまでの時間の推移を追って、どうにか一篇としてまとめ上げていれまでの時間の推移を追って、どうにか一篇としてまとめ上げていれまでの時間の推移を追って、どうにか一篇としてまとめ上げていれまでの時間の推移を追って、どうにか一篇としてまとめ上げていれまでの時間の推移を追って、どうにか一篇としてまとめ上げていれまでの時間の推移を追って、どうにか一篇としてまとめ上げていれまでの時間の推移を追って、どうにか一篇としてまとめ上げていれまでの時間の推移を追って、どうにか一篇としてまとめ上げていれまでの時間の推移を追って、どうにか一篇としてまとめ上げていれまでいた当時の様相を示すものだといえよう。

われるのである。

『古鏡記』は鏡の力で妖魔の一々を抹殺していくととに焦点が絞『古鏡記』は鏡の力で妖魔の一々を抹殺しているともにまかれた小説が、六朝志怪とも、あるいは中唐以後のいわゆる伝という一つのテーマで貫いている所と文 章 構成 上極めて重なり合という一つのテーマで貫いている所と文 章 構成 上極めて重なり合という一つのテーマで貫いている所と文 章 構成 上極めて重なり合いが、た朝志怪とも、あるいは中唐以後のいわゆる伝をがれておら、『古鏡記』は鏡の力で妖魔の一々を抹殺していくととに焦点が絞ぶしていると考えてよいであろう。

神記』は、まだ今日から考える小説の概念からは程遠く、やはり一生』に促された内的要求が強いように思われる。確かに干宝の『捜つまり、晋の干宝『捜神記』はまだ『父の婢の再生』や『兄の蘇みがある。

っておきたいという編者側の内的必要性において、些か欠けるうら

ところで『古鏡記』及び『遊仙窟』には、是非ともこの小説を作

書き留めておきたいという作者干宝の情熱がこもっているように思する形態であれ、正史から落ちこばれた人間の経験を記録としてののようである。たとえそれが伝え聞いた話の集大成であったにしかゝわらず、干宝はその野史にかなりの情熱を傾けて書いているも種の歴史であり、それも正史からは落ちこぼれた野史である。にも種の歴史であり、それも正史からは落ちこぼれた野史である。にも

ないこので、なんとか後世へ伝達しようとする創作的情熱にところがこの点、なんとか後世へ伝達しようとする創作的情熱にところがこの点、なんとか後世へ伝達しようとする創作的情熱にところがこの点、なんとか後世へ伝達しようとする創作的情熱にところがこの点、なんとか後世へ伝達しようとする創作的情熱にない。これを書き残したのではないかと思うのである。

 は、まだまだ稚拙な作品として位置付けられうるものであろう。は、まだまだ稚拙な作品として位置付けられうるものであろう。に怪異性は完全に消え、創作の志向は専ら人間の内面描写へと向うの内在する問題を掘り下げ、かくして作品を中篇にまで仕上げていの内在する問題を掘り下げ、かくして作品を中篇にまで仕上げていのものよりも長文だからめえ『古鏡記』や『遊仙窟』の方が盛唐以後るわけである。だから例え『古鏡記』や『遊仙窟』の方が盛唐以後の中高いえない。六朝志怪と唐代伝奇とを接続させるにふさわしい、つ言いえない。六朝志怪と唐代伝奇とを接続させるにふさわしい、つ言いえない。六朝志怪と唐代伝奇とを接続させるにふさわしい、つ言いえない。六朝志怪と唐代伝奇とを接続させるにふさわしい、つ言いえない。六朝志怪と唐代伝奇とを接続させるにふさわしい、つ言がえない。六朝志怪と唐代伝奇として作品として価値があるが、は、それはそれなりに、やはり過渡朝の作品として価値があるが、は、それはそれなりに、やはり過渡朝の作品として価値があるが、は、それはそれなりに、やはり過渡朝の作品として知道に関しているのと同様である。は、まだまだ稚拙な作品として位置付けられうるものであろう。

ŧ

- (1) 富岡謙蔵著『古鏡の研究』(大正九年丸善会社刊三~四頁)参照!
- (2)加藤常賢著『漢字の起源』(昭和四五年角川書店刊三五○頁)参照。
- 八銖銭。旧伝、此鏡見妖魅、得佩之者、為天神所福。故宣帝從危獲濟。(4)宣帝被収繫那邸獄。臂上猶帯史良娣合采碗転絲縄、繫身毒国宝鏡一枚、大如(3)駒并和愛著『中国古鏡の研究』(一九五三年岩波書店刊七頁)参照。

(『西京雑記』巻一)

- (5)高祖初入咸陽宮、周行庫府。金玉珍宝。不可称言。其尤鶩異者、……有方鏡。(「西京維有邪心、則膽張心動。秦始皇常以照宮人、膽張心動者、則殺之。(「西京維有邪心、則膽張心動。秦始皇常以照宮人、膽張心動者、則殺之。(「西京維有邪心、則膽張心動。秦始皇常以照宮人、膽張心動者、則殺之。(「西京維石」為。其尤鶩異者、……有方鏡。
- 元封中、有祗国献此鏡。照見魑魅、不獲隠形。(『洞冥記』巻一)(6)恐らく六朝期のものと考えられよう。

- (7)『抱朴子』参照。
- (8)駒井和愛著『中国古鏡の研究』(前掲)第四章陽燧及び方諸の形態。参照。
- (9) 其法鼓冶黄铜、以作方諸、以承取月中水、以水銀覆之、致日精、火其中、足水。服如小豆、百日盲者皆能視之、百日病者自愈、髪白遠黑、嫩落更生。…水。服如小豆、百日盲者皆能視之、百日病者自愈、髪白遠黑、嫩落更生。…
- 規所見、来神甚多。……(「抱朴子」内篇卷十五雜応) 或少、一示之後、心中自知干里之外、方来之事也。明鏡或用一。或用四、謂之四規。四規者、照之時、前後左右、各施一也。用四之日月鏡。或用四、謂之四規。 以表之事也。明鏡或用一。或用二、謂或用明鏡九寸以上自照、有所思存、七日七夕則見神仙。或男、或女、或老、
- (1) 又万物之老者、其精悉能假託人形、以眩惑人目、而常試人。唯不能於鏡中、 易其真形耳。是以古之入山道士、皆以明鏡径九寸以上、懸於背後、則老魅不 故如人形。若是鳥獸邪魅、則其形貌、皆見鏡中矣。……
 (五) 死而成犬。餘犬悉走。於是遂絶。乃鏡之力也。……
 (五) 不是與此一次。如此,不是與此一人而刺之。初作人叫、 故如人形。若是鳥獸邪魅、則其形貌、皆見鏡中矣。……
 (五) 不是與此一人而刺之。初作人叫、 故如人形。若是鳥獸邪魅、則其形貌、皆見鏡中矣。……
 (五) 不是與此一人而刺之。初作人叫、 故如人形。若是鳥獸邪魅、則其形貌、皆見鏡中矣。……
 (五) 不是即此。 如如人形。若是鳥獸邪魅、則其形貌、皆見鏡中矣。 如如人形。若是鳥獸邪魅、則其形貌、皆見鏡中矣。 如如人形。若是鳥獸邪魅、則其形貌、皆見鏡中矣。 如如人形。若是鳥獸邪魅、則其形貌、皆見鏡中矣。 如如人形。若是鳥獸邪魅、則其形貌、皆見鏡中矣。
- 有韓房者、自渠胥国来。獻、…火齊鐐広三尺、關中視物如昼。向鏡語則鏡中方賁玉人石鏡。此石色白如月、照而如雪。謂之月鏡。……(12)周霊王、……二十三年、起昆昭之台。亦名宜昭。聚天下異木神工。……時異(
- (13) 方丈山。有池、方百里。水浅可涉。尼色若金。……百鍊可為金、色青。照轉(13) 方丈山。有池、方百里。水浅可涉。尼色若金。……百鍊可為金、色青。照轉影応声而答。韓房身長一丈、垂髮至膝、……(『王子年拾遺記』卷三)
- 卷九) 是,其壁先掛一銅鏡、鏡中見二鹿。遂以刀斫、獲之、以為脯。(『搜神後記』是。其壁先掛一銅鏡、鏡中見二鹿。遂以刀斫、獲之、以為脯。(『搜神後記』
- (15) 日林国有神薬数千種。其西南有石鏡、方数百里、光明瑩徹。可鑑五騰六腑。不念仙人鏡。国中人若有疾、輙照其形、遂知病起何騰腑。即采神薬餌之、無不愈。(『述異記』巻下)

- (16)(殷)仲文時照鏡不見其面、数日而遇禍。……(『晋書』巻九十九殷仲文伝)『漢魏叢書』は任昉著とするが、任昉の著か祖冲之の著か、今定かにしがたい。
- (18)『晋書』巻七二萬洪伝参照。
- (19)『晋書』巻九五王嘉伝参照。
- (20) 『晋書』巻九四陶潜伝参照。
- (1) 劉開栄著『唐代小説研究』(中華民国三六年、商務印書館刊)二四~三一頁参照。

書局一○八~一一六頁参照。 段熙仲 「《古鏡記》的作者及其他」『文字遠遊・増刊十輯』一九六二年中華汪嵵編著『唐人小説』(一九五五年世界書局)三~一四頁参照。

- (3)鄭振鐸著『挿図本中国文学史』第二冊四九五~四九六頁(民国二一年)に従う。
- (66) 『古荒記』とおいては「吽」であり、『捜申記』においては「書生」である。日「燃以老桑樹……」……権使人伐桑樹煮之。亀乃立爛。(『異苑』巻三)日「燃以老桑樹……」……権使人伐桑樹煮之。亀乃立爛。(『異苑』巻三)の。」人甚怪之擅出、欲上呉王。……権命煮之焚柴万車、語猶如故。諸葛恪(36)呉孫権時、永康縣有人。入山 遇一大亀。……亀 便言曰「遊不量時、為君所(36)吳孫権時、永康縣有人。入山 遇一大亀。……亀 便言曰「遊不量時、為君所(36)
- (26)『古鏡記』においては「婥」であり、『捜神記』においては「書生」である

- すなわち「華表木」であり、『異苑』においては「老桑樹」である。(27)『古鏡記』においては「古鏡」であり、『捜神記』においては「千年神木」
- 「異苑」においては「諸葛恪」である。 「異苑」においては「諸葛恪」である。
- (29) …… 會有居人妻病邪魅、粟年不愈。憑乃勅之。其家宅傍有泉水。……中有一段之,不是有居人妻病邪魅、粟年不愈。憑乃勅之。其家宅傍有泉水。……中有一人。
- (30) 呉時…有鬼魅、宿者戰死。……時丹陽人湯応者大有廳武。……問是誰。答云刀逆擊、中之。府君下坐走出。…称府君者、是一老狒也。部郡者、是一老狸也。自是遂絶。(『搜神記』卷一八)
- (31) 『山海経』巻二(芸文印書館 郝懿行『山海経箋疏』)参照。
- 《32)東郷太湖、呉庚申蔵、於此有一軍士五百人。将破堰先以酒肉祈神。約令水涸(32)東郷太湖、呉庚申蔵、於此有一軍士五百人。将破堰先以酒肉祈神。約令水涸
- (33) 元嘉十八年、広陵下市縣人、張方女道香、……夜有一物假作其壻来云、…… 道香俄昏惑失常時、有海陵王纂若能療邪疑道香被魅請治之。始下一針、有一瀬、二嘉十八年、広陵下市縣人、張方女道香、……夜有一物假作其壻来云、……
- 物、亨壽遂静、永無災橫。(『捜神記』巻一八) 果得老蝎。大 如 琵 琶、毒長 数尺。西舎得老雄鶏父。北舎得老母猪。凡殺三果得老蝎。大 如 琵 琶、毒長 数尺。西舎得老雄鶏父。北舎得老母猪。凡殺三、物、 高 生明術数、……乃握剣至昨夜応処、
- (35)高祖永初中、……人有嫁女。……女忽然失惟、…巫云、是邪魅、…承蹇鼓以(35)高祖永初中、……人有嫁女。……女忽然失惟、…巫云、是邪魅、…遂擊鼓以
- 室中、常照十餘丈如昼日、……(『西京雑記』巻二)室中、常照十餘丈如昼日、……(『西京雑記』巻二)
- (37) 昆吾山、…採金錦之、以成八剣之精。一名捺日、以之指日、則光昼暗、金、見之則伏。……〈『王子年拾遺記』卷十)
- 苦乎、有即出紫丸赤丸與之服。服薬病無不差。如此数年後、呉有大疫、先生(38)負局先生者、呉郡人、莫知姓名。負石磨鏡。局循呉中磨鏡、轍問人得無有疾

家至戸到與薬活数万許人。……(『列仙伝』)

- (39)「昔人有遊東海者。既而風悪船漂不能制、船隨風浪、莫知所之。一日一夜得 死者十餘人。(『西京雑記』巻五) 至一孤洲。其侶歓然、下石植糗、登洲煮食。食 未 熱 而 洲没。在船者斫断其 **积、船復漂蕩。向者孤洲、乃大魚。怒掉揚載吸波吐浪而去、疾如風雲、在洲**
- (40) 『魯迅全集』第八巻『古小説鈎沈』(一九七三年人民文学社刊)所収。 上欲浮海求神仙、海水暴沸涌、大風晦冥、不得御楼船、乃还。……(『漢武
- (41)魏文侯時、西門豹為鄭令。…長老曰『苦 為 河 伯 娶婦。』…巫行視人家女好 記』巻一二六滑稽列伝) 河中。始浮行数十里、乃 没。…従 是 以 後、不敢復言為河伯娶婦。…(『史 者、云是當為河伯婦。即婢取。…共粉飾之。如嫁女床席。令女居其上、浮之
- (42)道由盧山、子女観於祠室。婢使指像人以戯曰「以此配汝。」…中流、舟不為 (4)騫保至壇丘塢上北楼宿、…「桐郎、道 東 鹏 樹 是。」:艦送詣丞相、渡江末 乃得渡。…故悉還二女。…(『捜神記』巻四) 行。誾船震恐、乃皆投物於水、船猶不行。…使妻沈女于水。…乃復投己女。
- (4)会稽石亭埭有楓樹。…有估客:載生鱧。至此聊放一頭於朽樹中。…村民見之 以魚鱧非樹中之物。咸謂是神、乃依樹起屋宰牲祭祀。…名鱧父廟。…禍福立 半、風浪起;桐郎得投入水、風波乃息。(祖台之『志怪』)
- (45)劉開栄著『唐代小説研究』(前掲)二七頁参照。 至。…後佔客返見其如此。即取作臛。於是遂絶。(『異苑』巻五〕
- (46) 汪辟礦著『唐人小説』(前掲)参照。
- (47) 『捜神後記』巻一参照。
- (48) 『武帝内伝』参照。
- (49)「詩経」『書経』『楚辞』「論語』『左伝』『礼記』『史記』『漢書』『列 女伝』『西京雑記』『文選』、また類書『芸文類聚』など、おびただしい。

(50) 『晋書』巻八二千宝伝参照。

- (51) 年代、場所、人物、事件を概略して後にそれに対する評価等を付すものが圧 三面記事に等しい。 倒的に多い。すなわち今日で云うなら興味本位に書かれた比較的程度の低い
- 52 著作郎兼任となり、勅命を奉じて、国史を編纂し、蘇綽の列伝を書くことに なった。という一文が本文中に見える。

(53)汪辟骥著『唐人小説』(前掲)参照。